

矢澤圭介先生のご退職によせて

立正大学副学長 大 竹 智

矢澤圭介先生が平成28年3月末日をもって、本学を定年退職されることになった。この日を迎えるにあたり、昨年10月末、先生がこの原稿の執筆依頼に私の研究室に來られた。

この時、ご指名を光栄に思うと同時に、学科の教員構成（勤務年数）を改めて知り（昨年の石井富美子先生への寄稿文は村尾先生がご担当）、そしてどのような事項を申し上げることが、先生のご退職に向けた饒の言葉になるのだろうかと思悩んだ。その結果、先生との15年間にわたる出来事ややり取り等を記すことが、オリジナリティのある原稿になるのではないかと考えた。そこで、矢澤先生のご経歴、ご専門の詳細は他の頁にお譲りして、ここでは、私との15年間にわたるお付き合いの中での思い出を語りたいと思う。

矢澤先生との出会いは、平成12年1月5日、前日の雪が残る熊谷キャンパス4号館1階奥の会議室であった。この日は私の採用人事の選考面接日で、面接委員として山本先生（主任）、島崎先生、杵尾先生、矢澤先生がご担当となっており、お茶を持って來られたのが迫田先生であった（後に分かったことだが、私を觀察するためにお茶出し役を買って出たとのこと）。気が付けば16年前の出来事（出会い）である。そして、第一印象は「提出した論文を良く読んでおられる先生」、「パンフレットの写真とまったく変わらない先生」というものであった。

いま先生方のお名前を列挙したが、当時はそのほかに原田先生、米野先生、石井先生、村尾先生等がおられ、矢澤先生は定年退職の順番としては下位であった。そのようなことから、矢澤先生とのお付き合いの期間の順番では、学科の中で私は2番目に古くなっていた。

さて、ここで改めて先生の略年譜を眺めると、現在の社会福祉学部の源泉となる保育専門学校から教員生活をスタートされている。その後、短期大学部、社会福祉学部の立ち上げに中心的な役割を担って來られた。まさに学部の生き字引的存在であった。そして、平成17年4月から平成20年3月までの3年間は学部長として学部を取りまとめて來られた。学部長時代には、田口学部長から引き継ぐ形で法学部、地球環境科学部との熊谷キャンパス再開発や大学執行部からの新学部構想案などが話題になるなど、学部運営が難しい時代を取り仕切って來られた。あの時は時間的制約がある中で、ギリギリの選択をせざるを得ない状況にあったように思われる。賛否はあったものの、先生としては学部の将来を考えた末の決断だったように思う。また、学部長として、短大時代からの旧知の仲であった教員を、厳しい処分にせざるを得なかったことは、教員としてあってはならない不適切な行為に対する激しい怒りとともに、独り断腸の涙を流していたのではなかっただろうか。さらに、学部長最後の年（平成20年）の入試結果では、学科開設以来初めての定員割れを起こし、責任を痛感していた。ちょうどこの年度は、私は在

外研修に出かけており、帰国間近の2月末に国際電話がかかってきた。何事かと思って出ると「大竹さん、学科の定員割れが確定した。帰国したら4月から学部の入試委員だから」と。思い立つとよく電話をかけてくる先生でもあった。

学部長を退任し、数年後に取られたサバティカルでは演劇（身体表現）に目覚められ、かつこれまで知らなかった世界での演劇仲間との出会いが、新たな喜びを得たようにも感じられた。また、この時には迫田先生が理事長を務められていた「茶々保育園」でのフィールドワークに精力的に取り組まれ、新たな研究の領域に活き活きとした時間を過ごされていた。そして、長年の学究の仲間らと新たな学会「日本子育て学会」を立ち上げられた。この学会は、これまではない、研究者・現場職員・保護者の三者による学会運営を目指した、新たな学会のあり方を体現したものであった。後年のご自身の研究では、これらの実践を通して、子育て環境には地域社会が重要な役割を担っていることに注目し、研究発表をされてきている。研究意欲は最後まで衰えず、病に倒れるまでは密かに「博士」の学位を取る思いもあったように思うが、少し気弱になってきたところも垣間見られ、私としては淋しさを感じていた。

改めて今、矢澤先生のご退職に接し、人間福祉学科・子ども教育福祉学科の「一時代」が終わることを実感する。

最後に、矢澤先生、長い間ありがとうございました。これからも自由奔放に、子育て研究および実践の分野で、お元気でご活躍されますことを祈念しております。